

東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告書

派遣生基本情報

氏名：見田悠子

所属先：現代文芸論研究室 博士課程2年

派遣形態：院生派遣

研究課題名：カリブの中心キューバ、ガルシア=マルケスの親友フィデル・カストロ

派遣先での活動

(1) 派遣先基本情報

国名：キューバ共和国

都市名：ハバナ

調査先研究機関名：

Bohemia ボヘミア（雑誌出版社）

Casa de las Américas カサデラスアメリカス文化センター

Biblioteca Nacional de Cuba José Martí ホセ・マルティ国立図書館

Biblioteca Central de la Universidad de Habana ハバナ大学中央図書館

Biblioteca de la Facultad de Arte y Letras ハバナ大学文芸学部図書館

Fundación de Alejo Carpentier アレホ・カルペンティエル・ファンデーション

Escuela Internacional de Cinematografía y Televisión 国際映画テレビ学校

他

コンタクトした主な研究者名：

マリオ・ピエドラ教授（ハバナ大学）

トマス・フェルナンデス=ロバイナ氏

ラファエル・ロドリゲス=ベルフラン博士(アレホ・カルペンティエル・ファンデーション)

ラファエル・ロサル校長（EICTV）

(2) 派遣期間

2012年10月24日出発、2012年12月7日帰国。総日数44日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

A：キューバにおける文学事情、フィデル・カストロの存在感、人々のフィデル・カストロ観の調査

B：レイナルド・アレーナスとアレホ・カルペンティエルにまつわる資料収集

アレーナスに関しては、どのような資料が手に入るかということ自体から調査する。カルペンティエルについては「驚異的现实論」「カリブ海沿岸地域の表象」を調査の中心におく。

C：カストロ体制下の具体物としてのキューバ

革命以降のキューバにおける文学作品を読むにあたって、またガルシア=マルケスが語るキューバについて考えるときに比較対象となし得る自身の体験を得るため、フィデル・カストロの存命中に現地で一定の期間

滞在し、社会を観察する。

(2) 実際に達成された成果

(*首都ハバナにおいて中流の経済力を持つ人たちとの接触が大半であった)

A⇒専門分野、職種、年齢に限らず豊富な読書経験が確認された。近年人気のある若い作家たちへの日本文化(アニメが大勢を占めるが、それに限らない)の影響が大きいことは興味深い。フィデル・カストロについての個々人の意見は、1ヶ月半という期間のなかでは明確につかむことが困難だった。キューバ人との間で社会問題や個々の政策についての議論は気軽にできるけれども、フィデル個人に話が及ぶとジェスチャーを交えて話を切り上げることになる。今回の経験で得られたものは、アンビヴァレンスな感情となにかしらの禁忌が働いているという印象の域を出なかった。

B⇒レイナルド・アレーナスに関しては、国内で迫害を受けていた時期に彼を援助したフェルナンデス=ロバイナ氏とコンタクトをとった。アレーナスについての彼の回想録“Misa para un Ángel”は国営の書店でも図書館でも見つからなかったが、彼の友人所蔵のものを複写されていた。文学に造詣の深い人物のなかにも、アレーナスについて全く知らない人は多かった。

アレホ・カルペンティエルに関しては、主にアレホ・カルペンティエル・ファンデーションで情報収集した。キューバにて基本文献と見なされているものや、キューバ国内で流されたカルペンティエル自信が語るインタビュー特集の映像資料なども手に入れた。当ファンデーションの副代表であるロドリゲス=ベルフラン博士には、カルペンティエルの出生文書の偽造問題とキューバへの愛着について具体的なデータ、フランス語からスペイン語への移行について、移民の国キューバにおけるカルペンティエル観、新聞記者であったカルペンティエルについて、カリブ地域内におけるカルペンティエルそしてガルシア=マルケスについてなど話題も多岐にわたってご指導いただいた。自身の専門分野に自覚的な博士にキューバ人にとってのカルペンティエル像を伺えたのは貴重な経験であった。カルペンティエルとガルシア=マルケスの個人的な交流の深さも確認できた。

C⇒ハバナの人種構成やスペイン系キューバ人の食生活などはある程度知ることができた。劇場、音楽ホール、映画館、美術館などが安価で民衆に開かれているためだろう、一般的に高い文化水準が印象的だった。しかし当該地域の経済活動の様相は、諸外国との関係や法律の変更によって当初の想像以上の早さで変化している。本調査期間に観察できたハバナの社会は、フィデル・カストロが国家評議会議長職にあった時代とはすでに異なる社会である可能性も高く、これから来年1月に「海外渡航の自由化」が行われた場合にどのように変化するかも未知数である。継続的な調査の必要性を感じた。

(3) 今後の研究展望

豊富に得られたカルペンティエルの理論面における発言を吟味し、他のカリブ海沿岸地域文学の作品分析にも役立つ。後にカリブ海沿岸地域全域を見渡す際に拠り所となる視座を得られるように、本調査期間に築いた人間関係をベースにキューバの情勢を追い続ける。現地での情報入手が難しかったフィデル・カストロについては広範な文献にあたって理解を深める。

可能ならば、キューバの若い世代の文学作品を翻訳し日本の若者の反応も知りたい。